

將軍

一白擣隊

明治三十七年十一月二十六日の未明だつた。第×師団第×聯隊の白擣隊は、松樹山の補備砲台を奪取する為に、九十三高地の北麓を出發した。

路は山陰に沿うてゐたから、隊形も今日は特別に、四列側面の行進だつた。その草もない薄闇の路に、銃身を並べた一隊の兵が、白擣ばかり仄かせながら、静かに靴を鳴らして行くのは、悲壮な光景に違ひなかつた。現に指揮官のM大尉なぞは、この隊の先頭に立つた時から、別人のやうに口数の少ない、沈んだ顔色をしてゐるのだつた。が、兵は皆思ひの外、平生の元氣を失はなかつた。それは一つには日本魂の力、二つには酒の力だつた。

少時行進を続けた後、隊は石の多い山陰から、風当りの強い河原へ出た。

「おい、後を見ろ。」

紙屋だつたと云ふ田口一等卒は、同じ中隊から選抜された、これは大工だつたと云ふ、堀尾一

等卒に話しかけた。

「みんなこつちへ敬礼してゐるぜ。」

堀尾一等卒は振り返つた。成程さう云はれて見ると、黒々と盛り上つた高地の上には、聯隊長始め何人かの将校たちが、やや赤らんだ空を後に、この死地に向ふ一隊の士卒へ、最後の敬礼を送つてゐた。

「どうだい？ 大したものぢやないか？ 白裸隊になるのも名譽だな。」

「何が名譽だ？」

堀尾一等卒は苦々しさうに、肩の上の銃を振り上げた。

「こちとらはみんな死ヒビに行くのだぜ。して見ればあれは××××××××××××××さうつて云ふのだ。こんな安上りな事はなからうちやねえか？」

「それはいけない。そんな事を云つては×××すまない。」

「べらぼうめ！ すむもすまねえもあるものか！ 酒保の酒を一合買ふのでも、敬礼だけでは売りはしめえ。」

田口一等卒は口を噤ヨメんだ。それは酒気さへ帶びてゐれば、皮肉な事ばかり並べたがる、相手の癖に慣れてゐるからだつた。しかし堀尾一等卒は、執拗にまだ話し続けた。

「それは敬礼で買ふとは云はねえ。やれ××××とか、やれ××××だと、いろんな勿

体をつけやがるだらう。だがそんな事は嘘つ八だ。なあ、兄弟。さうぢやねえか？」

堀尾一等卒にかう云はれたのは、これも同じ中隊にゐた、小学校の教師だつたと云ふ、おとなしい江木上等兵だつた。が、そのおとなしい上等兵が、この時だけはどう云ふ訳か、急に囁みつきさうな権幕を見せた。さうして酒臭い相手の顔へ、悪辣な返答を抛りつけた。

「莫迦野郎！ おれたちは死ぬのが役目ぢやないか？」

その時もう白裸隊は、河原の向うへ上つてゐた。其処には泥を塗り固めた、支那人の民家が七八軒、ひつそりと暁あかつきを迎へてゐる、——その家々の屋根の上には、石油色に襞をなぞつた、寒い茶褐色の松樹山が、目の前に迫つて見えるのだつた。隊はこの村を離れる、四列側面の隊形を解いた。のみならずいづれも武装した儘、幾条かの交通路に腹這ひながら、じりじり敵前へ向ふ事になつた。

勿論江木上等兵も、その中に四つ這ひを続けて行つた。「酒保の酒を一合買ふのでも、敬礼だけでは売りはしめえ。」——さう云ふ堀尾一等卒の言葉は、同時に又彼の腹の底だつた。しかし口数の少ない彼は、ぢつとその考へを持ちこたへてゐた。それだけに、一層戦友の言葉は、丁度傷痕にでも触れられたやうな、腹立たしい悲しみを与へたのだつた。彼は凍えついた交通路を、獸のやうに這ひ続けながら、戦争と云ふ事を考へたり、死と云ふ事を考へたりした。が、さう云ふ考へからは、寸毫の光明も得られなかつた。死は×××××にしても、所詮は呪ふべき怪物だ

つた。戦争は、——彼は殆^{ほとんど}戦争は、罪悪と云ふ氣さへしなかつた。罪悪は戦争に比べると、個人の情熱に根ざしてゐるだけ、××××××××出来的点があつた。しかし××××××××××××××××外ならなかつた。しかも彼は、——いや、彼ばかりでもない。各師団から選抜された、二千人余りの白擲隊は、その大なる×××にも、厭でも死ななければならぬのだつた。……

「来た。来た。お前は何處の聯隊だ?」

江木上等兵はあたりを見た。隊は何時か松樹山の麓の、集合地へ着いてゐるのだつた。其処にはもうカアキイ服に、古めかしい襷をあやどつた、各師団の兵が集まつてゐる、——彼に声をかけたのも、さう云ふ連中の一人だつた。その兵は石に腰をかけながら、うつすり流れ出した朝日の光に、片頬の面砲をつぶしてゐた。

「第×聯隊だ。」

「パン聯隊だな。」

江木上等兵は暗い顔をした儘、何ともその冗談に答へなかつた。

何時間かの後、この歩兵陣地の上には、もう彼の砲弾が、凄まじい唸りを飛ばせてゐた。目の前に聳えた松樹山の山腹にも、李家屯の我海軍砲は、幾たびか黄色い土煙^{つちけむり}を揚げた。その土煙の舞ひ上る合間に、薄紫の光が迸るのも、昼だけに、一層悲壯だつた。しかし二千人の白擲隊は、かう云ふ砲撃の中に機を待ちながら、やはり平生の元気を失はなかつた。又恐怖に挫^{すた}がれない為

には、出来るだけ陽気に振舞ふ外、仕様のない事も事実だつた。

「べらぼうに撃ちやがるな。」

堀尾一等卒は空を見上げた。その拍子に長い叫び声が、もう一度頭上の空氣を裂いた。彼は思はず首を縮めながら、砂埃の立つのを避ける為か、手巾^{ハシナチ}に鼻を掩つてゐた、田口一等卒に声をかけた。

「今のは、二十八珊^{サン}だぜ。」

田口一等卒は笑つて見せた。さうして相手が氣のつかないやうに、そつとポケットへ手巾ををさめた。それは彼が出征する時、馴染の芸者に貰つて來た、縁に繡のある手巾だつた。

「音が違ふな、二十八珊は。——」

田口一等卒はかう云ふと、狼狽したやうに姿勢を正した。同時に大勢の兵たちも、声のない号令でもかかつたやうに、次から次へと立ち直り始めた。それはこの時彼等の間へ、軍司令官のN^{*}将軍が、何人かの幕僚を従へながら、嚴然と歩いて來たからだつた。

「こら、騒いではいかん。騒ぐではない。」

将軍は陣地を見渡しながら、やや鏑のある声を伝へた。

「かう云ふ狹隘な所だから、敬礼も何もせなくとも好い。お前達は何聯隊の白擲隊ぢや?」

田口一等卒は将軍の眼が、彼の顔へちつと注がれるのを感じた。その眼は殆^{ほとんど}処女のやうに、

彼をはにかませるのに足るものだつた。

「はい。歩兵第×聯隊であります。」

「さうか。大元氣にやつてくれ。」

将軍は彼の手を握つた。それから堀尾一等卒へ、じろりとその眼を転すると、やはり右手をさし伸べながら、もう一度同じ事を繰返した。

「お前も大元氣にやつてくれ。」

かう云はれた堀尾一等卒は、全身の筋肉が硬化したやうに、直立不動の姿勢になつた。幅の広い肩、大きな手、頬骨の高い赭ら顔。——さう云ふ彼の特色は、少くともこの老将軍には、帝国軍人の模範らしい、好印象を与へた容子だつた。将軍は其處に立ち止まつた儘、熱心になほ話し続けた。

「今打つてゐる砲台があるな。今夜お前たちはあの砲台を、こつちの物にしてしまふのぢや。さうすると予備隊は、お前たちの行つた跡から、あの界隈の砲台をみんな手に入れてしまふのぢや。何でも一遍にあの砲台へ、飛びつく心にならなければいかん。——」

さう云ふ内に将軍の声には、何時か多少戯曲的な、感激の調子がはひつて來た。

「好いか？ 決して途中に立ち止まつて、射撃などをするぢやないぞ。五尺の体を砲弾だと思つて、いきなりあれへ飛びこむのぢや、頗んだぞ。どうか、しつかりやつてくれ。」

将軍は「しつかり」の意味を伝へるやうに、堀尾一等卒の手を握つた。さうして其處を通り過ぎた。

「嬉しくもねえな。——」

堀尾一等卒は狡猾さうに、将軍の跡を見送りながら、田口一等卒へ目交^{ゆめあ}せをした。

「え、おい。あんな爺さんに手を握られたのぢや。」

田口一等卒は苦笑した。それを見るとどう云ふ訳か、堀尾一等卒の中には、何かに済まない気が起つた。と同時に相手の苦笑が、面憎いやうな心もちにもなつた。其處へ江木上等兵が、突然横合ひから声をかけた。

「どうだい、握手で××××の人は？」

「いけねえ。いけねえ。人真似をしちや。」

今度は堀尾一等卒が、苦笑せずにはゐられなかつた。

「××れると思ふから腹が立つのだ。おれは捨ててやると思つてゐる。江木上等兵がかう云ふと、田口一等卒も口を出した。

「さうだ。みんな御國の為に捨てる命だ。」

「おれは何の為だか知らないが、唯捨ててやるつもりなのだ。××××××××でも向けられて見ろ。何でも持つて行けと云ふ気になるだらう。」

江木上等兵の眉の間には、薄暗い興奮が動いてゐた。

「丁度あんな心もちだ。強盗は金さへ巻き上げれば、×××××××云ひはしまい。が、おれたちはどつち道死ぬのだ。×××××××××××××××たのだ。どうせ死なずにすまないのなら、綺麗に×××やつた方が好いちやないか？」

かう云ふ言葉を聞いてゐる内に、まだ酒気が消えてゐない、堀尾一等卒の眼の中には、この温厚な戦友に対する、悔蔑の光が加はつて來た。「何だ、命を捨てる位？」——彼は内心さう思ひながら、うつとり空へ眼をあげた。さうして今夜は人後に落ちず、将軍の握手に報いる為、肉彈にならうと決心した。……

その夜の八時何分か過ぎ、^{*}手擲弾に中つた江木上等兵は、全身黒焦になつた儘、松樹山の山腹に倒れてゐた。其処へ白擲の兵が一人、何か切れ切れに叫びながら、鉄条網の中を走つて來た。彼は戦友の屍骸を見ると、その胸に片足かけるが早いか、突然大声に笑ひ出した。大声に、——

実際その咲笑の声は、烈しい敵味方の銃火の中に、気味の悪い反響を喚び起した。

「万歳！ 日本万歳！ 悪魔降伏。怨敵退散。第×聯隊万歳！ 万歳！ 万々歳！」

彼は片手に銃を振り振り、彼の目の前に闇を破つた、手擲弾の爆発にも頓着せず、続けさまにかう絶叫してゐた。その光に透かして見れば、これは頭部銃創の為に、突撃の最中発狂したらしい、堀尾一等卒その人だつた。